



TITLE:

## 中頓別に於ける日食観測(4)

AUTHOR(S):

小山, 秋雄

---

CITATION:

小山, 秋雄. 中頓別に於ける日食観測(4). 天界 1936, 17(188): 61-64

ISSUE DATE:

1936-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167376>

RIGHT:

## 中頓別に於ける日食観測 (4)

小山 秋 雄

(3)

4時に眼は覺めたが、太陽が山から顔を出すと早速シロスタートの調節に掛る。昨日は西南の風激しく今日もこの分だと風除の急造が必要だつたが幸ひ風もないだ。9時京都の運送店の主人深尾老來着。これで京都關係の日食當日の顔觸は：——小山秋雄、堀井政三、木邊成麿、稻村賢三、中村 饒、前田治久(以上観測隊宿舍に合宿)、河路甲午郎、是枝正一、宮道 馨、上原虎雄、水野千里、深尾尙武の諸氏及稚内車電所の田澤勇、大工の東日本光學の林 典八、名古屋の早川の諸氏であつた。

10時最終の豫行演習をすます。11時の報時の頃より村の警備隊の手で7, 80米内に立入禁止となる。小學校は朝より臨時休業。朝來雲は少しはあるが、大丈夫な空模様である。正午東京隊、チエツコ隊と共に一同顔を揃へ賑かに最後の中食をとる。朝來「成功を祈る」といつた電報頻々と來り、郵便局の出張所學校の玄関にできる。13時一同宿舍に集合。初虧観測の打合せをやる。分擔は

ザルトリウス：シヤター—小山、取枠—是枝、聯絡—前田、暗室—堀井

6 糎 屈 折：木邊

ザルトリウス、ファインダー：田澤

5 糎 屈 折：堀井

クロノメータ：稻村

2時の報時をすませるとクロノメータの読み開始。堀井、木邊、田澤の3氏夫々望遠鏡を覗いてゐる。緊張した瞬間だつた。幸ひ雲には遮ぎられず2時7分初虧終了。木邊君の合圖と共に小山クロノメータの面を見てシヤターを切り部分食の寫眞を一分置きにとる。接觸の時刻を寫眞的に出すためだ。取枠不足のため前田君及東君に暗室(200米はなれた)との間を往復してもらふ。雲が大分來たが兎に角10分餘で豫定通り1打撮影。初虧観測は先づ無事終つた様子である。チエツコの3米半カメラのコパール君はビントグラスを覗き込み“1st contact, 1st contact”と叫んで嬉しさう。東京隊の橋元先生は小舎の外にセオドライトを持出して初虧の時刻を取られた模様。木邊君は

乾飯の裏引に又朝來二度目の暗室入り。2時半曇硝子を通して部分食に見入つてゐる村の人々を見ながら一同宿舍に引上げ、皆既観測の最後の打合をやる。分擔は

ザ ル ト リ ウ ス：取枿—小山,	シヤター—是枝
10 種 反 射 鏡：取枿—堀井,	シヤター—上原
ト リ プ レ ッ ト：取枿—木邊,	シヤター—前田
ツア イ ス, ペ ッ バ ル：中村,	3 種屈折：河路 (Starter)
ク ロ ノ メ ー タ ー：稻村	

校庭に出て半分以上虧けた太陽を眺めるが慌だしい重苦しい氣持だ。裏引すみの乾飯を暗室の眞暗の中で木邊君と共に取枿に恐る恐る入れる。終つて



日食の前夜 中 稻 是 堀 前 木 小 奥 河  
村 村 枝 井 田 邊 山 田 路

廊下を馳けて來る時の、窓外の黄ばんだ何とも言へぬ景氣は今だに忘れられぬ。準備終つて組立暗箱を持出して記念寫眞を撮る餘裕も出來て來るが、シロスターの調節を氣にして撮影。一向豫想した程暗くなつて來ぬので本當の所日食直前といふ氣が餘りしない。梟が鳴き出して來た。雲が頻りに太陽の傍を通るが氣にしてもしかたがないといふ氣があつたのが、一向苦にならぬ。陰影が皆三日月形になつて來たのもその頃だつたらうか。3分前の呼聲の頃に地面に一面縞が見え始めた。シヤド1バンドだ。水中にゐる様だ。

冷氣を感じて來た。1分前の呼聲がして間もなく河路氏の“go”の後圖。同時に稻村氏の“零1, 零2”の呼聲。大分慌てた人もあつたらしいが、幸ひ小生の所は順調に“go”と共にシヤタ1を是枝氏切る。“コロナ, コロナ”の小さな呼聲に氣が付き振返る。氣持のよい薄青い空の眞中に銀黄色したコロナ。もつと圓いものかとかねて想像してゐたのに、意外に尖つた角を突出した姿はグロテスクな感じさへした。80秒の露出中裕々と雙眼鏡で見たには見たが判きりした記憶はない。金星は勿論だが火星も見えた氣がする。自分の横に立つてゐるコパ1ル君はブリキの手製のシヤタ1を例の無邪氣な手附で、左右に動かしたり取枠を換へたり黙つてやつてゐる。『小山さん、小山さん』とこの最中電報の配達の來たのには大慌てに叱つて、やつと追返したものの、こんな見當はずれの事をされたのにはたまげた。2分間は長い様で短く。意外に明るかつたので演習中よりも操作滑かに進み、豫定の4枚目の露出を103秒目に終へ、後に數秒を残した。併し一寸と慌てて4枚目はびびらした。ダイヤモンドリングは美しかつた。思はず一同萬歳を唱へたが一向脊の荷が下りた様な氣がしなかつた。早速ピ1ルが持出され觀測隊の人々と村の人達とで祝杯を舉げられたが、復圓の寫眞を撮らねばならぬので乾板の入換。フィルタ1, シヤタ1の交換で小生達は忙しい。觀測終了と思つたのか、ぞろぞろ村の人が柵の所へ押掛け目白押しになつて見物だ。復圓も矢張り相當雲が來たが、初虧復圓共にその瞬間は全然雲に妨げられず、又皆既の時も周圍には相當雲があつたが太陽の所は晴れ、後半數秒薄雲が少し掛つたかと思はれる程度で甚だ幸運に恵まれた譯である。5時の報時をとつて觀測完了。急に疲勞が出て來て空腹と胸に痛みを感じる。新聞記者が押掛けて來たが、橋元先生の所は既に現像も終り『まづ落第生といつた成績でしたよ』と言はれるが、仲々どうして、とても朗な相好だ。チェツコ隊も大機嫌でス1カ隊長も夕陽の中で感想談を記者に取巻かれ求められるまゝにやつてゐる。小學生の旗行列が市街地へ向け繰出して行く。もう少し位埃や砂が掛つても構はぬと群がる村人に觀測器械や太陽の投影像を見せる。此方も大分御機嫌だつたらしい。すっかり晴渡つた夕空はコバルト色に澄み、數時間前の皆既を思

出させる。夕食後標準尺度を撮影する準備をしてゐると、セフェウス座ε星の南に新星発見の通知だ。急に疲れが出て来て現像も明晩に延ばす事にし、新星も木邊君に見る様に頼んだ事で、自分は外へ出て一寸見るも元氣なかつた。

#### (4) そ の 後

翌日は午前小學兒童に器械見せ午後解體、小學校の先生方に手傳つていただきコンクリ臺一つになる。夜、村の協賛會主催の送別宴大正亭にて催される。大切な標準尺度及現像が残つてゐるので残念ながら中座し、堀井、木邊兩君とでやり始める。最初より機嫌で鼻唄混りにやつてゐたが、故障なく進行し、3時頃赤外乾板のうまく出てゐるのを赤ランプの下で眺めて木邊君と思はず握手。

6月21日。東京隊は出立の先陣を切り11時の汽車で立つ。午後山本夫人を案内して鐘乳洞へ赴く。作見小平氏に歸途色々説明をきき、小雨降る白き徑を夕闇迫る中頓の市街へ歸つて来る。夜21時頃より翌曉3時まで掛つて木邊君の乾板に標準尺度を撮影、現象を終へる。

翌22日チエツコ隊はプラツトフォームで兩國國旗を前に記念撮影をして出立する。午後小生達の荷造簡単にすませ、夕食を學校の先生方と共にし、お別れを惜む。

23日。自分達4人村長、局長、校長その他協賛會の方々、宿舍食堂の世話された方々、小學兒童の盛大な見送りの中に11時1ヶ月餘滞在し、漸くお馴染の多くなつた思出深い北見の山村中頓別を後にした。見馴れた校庭も校舎も間もなく視野を去つた。

自分達は茲に幸ひ好晴に恵まれ、地元の方々の厚き援助の下に成功裡に今日の日食観測を終へた。此の機會に於ても種々便宜を與へられた北海道廳農産課長阿部平三郎、同課和田敏郎、宗谷支廳長高尾善次、中頓別村長佐藤友太郎の諸氏及中頓別皆既日食協賛會の役員諸氏に深く感謝の意を表する次第である。(完)